

George Whitefield and the Rise of the  
Trans-Atlantic Evangelical Culture, 1738-1771  
(ジョージ・ホイットフィールドと  
環大西洋福音主義文化の成立:1738-1771)

Shitsuyo Masui\*

**SUMMARY:** This article studies the rise of the trans-Atlantic Evangelical culture before the American Revolution, focusing upon the itinerant ministry work of George Whitefield. Whitefield is important not just as the “founder” of American revivalism but also as the chief shaper of the Evangelical communication network among the Calvinist groups in the Anglo-Atlantic world. The previously existing network of colonial elite Protestant ministers eventually expanded to include non-elite colonists thanks to Whitefield’s outreach to the populace. His trans-Atlantic ministry went beyond the ethnic and racial as well as the denominational boundaries. As seen in the process of publication of the elegy written by Phillis Wheatley on Whitefield’s death, the trans-Atlantic Evangelical revival movement provided the energy to transform the religious as well as the cultural landscape of pre-Revolutionary America.

---

\* 増井 志津代 Associate Professor, Department of English Literature, Sophia University, Tokyo, Japan.

## 序

1771年、植民地アメリカ、ボストン在住の黒人奴隷少女フィリス・ホイートリー (Phillis Wheatley, c. 1753-1784) は哀悼詩「1770年、ジョージ・ホイットフィールド牧師の死に寄せて」(“On the Death of the Rev. Mr. GEORGE WHITEFIELD. 1770.”) をロンドンとボストンで出版し、新旧イングランドで新進詩人として一躍注目を浴びる。この詩は、英国貴族、ハンティンドン伯爵夫人セリーナ・ヘイスティングズ (Selina Hastings, Countess of Huntingdon, 1702-1791) に捧げられたもので、当時、ホイートリーの年齢は十八歳位だったと推定される。1770年、マサチューセッツのニューベリーポートで巡回伝道中客死したアングリカン教会牧師ジョージ・ホイットフィールド (George Whitefield, 1714-1770)、その死を悼む黒人奴隷の少女、そして英国の伯爵夫人の間には、一見して共通項は見出し難い。白人牧師の死を黒人奴隷の少女が哀悼し、その詩が英国貴族の女性に捧げられ、少女が詩人として国際的名声を得るといふ、人種、性、階級の境界を越えた出来事の背景には、三者を結ぶ18世紀アングロ・アメリカ社会の特殊事情がある。三者は、後年の歴史家に第一次大覚醒運動と名付けられた18世紀環大西洋の信仰復興(リバイバル)運動、そしてこれを契機に誕生した福音主義<sup>1</sup>プロテスタント・ネットワークにより育まれた宗教的、文化的基盤を共有していた。ホイットフィールドは、新旧イングランドを結ぶ18世紀前半の福音主義ネットワークの象徴的存在であった。

1738年の新大陸初渡航以来、南部ジョージアでの孤児院ベテスダ建設、フィラデルフィア、ボストン、ニューヨークに於ける巡回伝道活動の為、アメリカ植民地を縦断したホイットフィールドは、行く先々で人気を得、たちまち大衆的文化ヒーローとなる。最初のフィラデルフィア訪問について、当時出版印刷業を営んでいたベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin, 1706-90) は次のように記している。「1739年、英国から、かの地で巡回説教者として名を馳せていたホイットフィールド師がやって来た。最初は当地のいくつかの教会が説教を許可したのだが、牧師は彼を嫌い、講壇に迎えることを拒否したので、野外で説教することを余儀なくされた。あらゆるセクトや教派から大勢が説教を聞きに行き、その説教の聴衆への驚くべき影響や、皆生まれながらに半分獣か、あるいは半分悪魔のようだと言って、激しく批判されるのにも関わらず、聴衆が彼を賞賛し、敬意を払う様を見て、そこに集まった一人であった私には考えさせられるものがあった」。さらに、フランクリンはホイット

フィールド訪問により、たちまち、フィラデルフィア住民の多くが宗教的興奮に巻き込まれていった様子を『自伝』中、記録している。<sup>2</sup>

未だ国家として統一のなされていない独立前夜のアメリカ植民地では、英国系、オランダ系、ドイツ系等のヨーロッパ移民、黒人奴隷、ネイティブ・アメリカンが、それぞれの共同体を形成しており、政治的にはもちろん、宗教的、文化的統合も特には存在していなかった。そのような状況の中で、植民地全土にまたがる活動を展開し、彼は行く先々で注目を浴びる。ホイットフィールドが植民地の宗教的エリート層の一部に敬遠されたことを、フランクリンは記録しているが、同時に、彼は人種、民族を越えて、圧倒的な大衆層の支持を得た。本稿は、新旧イングランドの覚醒運動の展開、これにより育まれた独立革命前夜の宗教、文化の特徴をホイットフィールドに焦点をあてつつ探る。

## 1. オックスフォード・メソジストと「新生」体験

「私は、1714年12月、グロチェスターで生まれた。父母はベル・インという宿屋を営んでいた。父は私が二歳の時に死没した<sup>3</sup>」との書き出しでホイットフィールド自伝は始まる。宿屋での自らの誕生を、同じく宿屋で生まれ、飼葉桶に寝かさされた、福音書のキリスト降誕になぞらえている点が特徴的である。<sup>4</sup>父の死後、七人の子供を抱え寡婦となった母の手で育てられた幼少時代は決して裕福ではなく、宿屋を切り盛りする母の下働きとして過ごした。彼と同じ大覚醒期の主要人物ジョナサン・エドワーズ (Jonathan Edwards, 1703-1758)、また、オックスフォード・メソジストの仲間であるウェスレー兄弟は何れも敬虔な家庭の出身として知られているが、少年時代のホイットフィールドの環境は異なる。宿屋に出入りする客の中には、酔客、売春婦等、敬虔な家庭からは遠ざけられたり、社会の周縁的な位置にある人びともいる。少年時代の彼の環境は遊興的なものであった。「小遣いは大概、演劇や時代の流行の余興を観るのに使った。カード遊びやロマンスを読むのがたいそう好きだった」と語るホイットフィールドは、エドワーズやウェスレーが知る由もない通俗的世界に幼くして馴染んでいた。<sup>5</sup>

自伝中ホイットフィールドは観劇、また劇作品を読む楽しみに自分があまりにのめり込んで行くことへの反省を、罪悪感を持ちつつ幾度もくり返し告白している。しかし、宿屋の下働きとして知った世界、夢中になった通俗文学や観劇は、大衆説教者となった彼が、民衆の心を獲得し

で行く弁説技能を身につける為の素地を育んだとも言える。

1732年、十八歳の時、ホイットフィールドは「給費賄学生」(servitors)として、学費免除を受けてオックスフォードのペンブルック・カレッジに入学許可される。特別枠の学生は、階級が明確に分かれた大学で、同じ学生の立場ではありながら「紳士階級自費学生」(gentleman commoners)の従者の生活をするを条件に入学を許されていた。「大学入学が許可され、そこでの生活が始まり、宿屋で働いていたことが役立った」、また、気の利いた自分を「紳士達は最眞にし、大勢が私を従者に望んだ」とホイットフィールドは給費生活の順調な開始について語っている。しかし、次第に、大学で目にする紳士階級学生の豪華な生活は、彼にとっては受け入れ難いものとなる。「多くの若い学生が贅沢な生活に耽り、勉学をおろそかにしているのを見て、しばしば私の魂は悲しみに満ちた」と、有閑紳士階級学生への批判をも記している。<sup>6</sup>

従者の傍ら学業を両立させる大学生生活は、次第にホイットフィールドを肉体的、精神的に疲弊させて行く。一年目の生活が終わる頃、彼はチャールズ・ウェスレー (Charles Wesley, 1707-1788) に会う。孤独なホイットフィールドの状況を悟ったチャールズは、ドイツ敬虔派(German Pietists)のオーガスト・ヘルマン・フランケ (August Hermann Francke, 1663-1727) の著書を二冊手渡す。ホイットフィールドを導く目的でチャールズは更に、ヘンリー・スコウガルの『人の魂に在る神の生命』(Henry Scougal, *Life of God in the Soul of Man*) を貸す。この本も、フランケの著作と同じく形式化した宗教を批判、キリストの内住を得ることの重要性を強調し、また社会的弱者の救済を説く敬虔主義的内容の色濃い著作であった。読書を通し、ホイットフィールドは「新しい創造」、すなわち「新生」(the new birth) の最初の体験をしたと感じる。『『真の信仰は魂が神と結ばれることであり、そしてキリストが私達の内に形作られるのです』と書かれた箇所を読んでいた時、ホイットフィールドは、「聖なる光が直ちに私の魂を刺し、その時、初めて私は新しく創られた者であるとの確信を得た」のだと自らの思いを告白している。<sup>7</sup> その後、チャールズを通じて、大学内で敬虔主義的な活動を開始していた他の学生達にも紹介される。

当時リンカーン・カレッジのフェローを務めていたジョン・ウェスレー (John Wesley, 1703-91) と、その弟のチャールズは、「ホーリー・クラブ」(Holy Club) と命名された敬虔主義的信仰者の集まりをオックスフォードの学生を集めて始めていた。活動初期、彼等は、日曜日の夜は神学、また週日の夜は古典を学習する目的で集まっていたが、次第に勉

強よりも宗教的实践に重点を置くようになる。会のメンバーは、囚人や病人の慰問、断食の实践、祈りを尊ぶ生活を行い、「神を愛し、質朴な生活、厳しく自己吟味を行う修練のプログラムの自らに課して行った」と、ホイットフィールドの知己の一人、ギリーズは記している。<sup>8</sup> ドイツ敬虔主義の影響下、宗教的实践としての慈善活動に彼等は積極的に取り組んだ。極端に「秩序と形式」(order and method)を重視するウェスレー等の生活態度は、周囲から揶揄を込めて「形式尊重主義者」(Methodists)と呼ばれるようになっていた。<sup>9</sup>

メソジスト学生達の側から他の学生達の退廃的な生活態度を批判することもあった。ことに、大学で幅を利かす紳士階級自費学生の華やかな生活は、ホイットフィールドのような給費賄学生だけでなく中流階級出身学生にとっても目に余るものがあった。同じ学生とは言え、中流階級以下出身の学生が富裕階級学生達の交友に入れられることは殆どない。中流以下の階級出身者にとっては、貴族的生活を大学に持ち込む紳士階級の遊興は時には快樂主義的退廃と感じられた。ホイットフィールドとは違い、「自費学生」(commoners)<sup>10</sup>ではあるが、やはり中流階級出身のウェスレー兄弟も上流階級の派手な社交生活に反発を覚えていた。ホーリー・クラブのメンバーはウェスレー等自費学生やホイットフィールドのような給費賄学生から成り、紳士階級出身者は一人もいない。伝統ある階級的な大学社会で、決してその中心にはいることのできない一般学生の支配者階級への反律が、より道徳的で宗教的な熱心を求めるメソジスト学生のアイデンティティの基盤ともなって行った。

極端に禁欲的な修練を求めるメソジストの特徴は、紳士階級学生の従者の生活を送っていたホイットフィールドには特に極端に表れた。ホーリー・クラブの規範をより実直に自らに課し、実践することにより、屈辱的だと感じていた従者としての現実から逃れることができたのかも知れない。メソジズムには、運動当初より上流階級への反律と、中産階級の道徳主義、厳しい節制への訓練が特徴として備わっていく。

ウェスレー兄弟の敬虔主義に影響され、メソジスト運動参加初期のホイットフィールドは瞑想と内省をくり返す霊的修養と節制の生活にのみこんで行く。食事の節制や断食を繰り返し、寒さに震えながら外気の中で何時間も祈りを捧げるといった極端な生活は、やがて給費賄学生としての務めや学業の妨げになり、ついに従者の職も解かれてしまう。厳しい節制生活は、精神的肉体的に次第に彼を追い詰め、次第に病へと追いやった。この病気療養中、ホイットフィールドは、決定的な「新生」体験を持つことになる。

オックスフォード・メソジストにとって、彼等が「新生」と呼ぶ回心体験は人の生涯における最も重要な転換期として理解された。ホイットフィールドは6、7週間病床に伏した後、この体験をする。「しかし、ああ、なんとと言う喜び、言葉に尽くせない喜び、栄光に満ちた喜びで私の魂は充たされ、罪の重荷は取り去られ、神の赦しの愛が心に満ちた。慰めに飢えた私の魂が、信仰の確信で溢れたのだ！これが、まさに私の決断の日、永遠に記念される日であった」と、自らの「新生」体験の日について記している。<sup>11</sup> この体験以降の記録は、それまでの内省的な調子から、確信に満ちた語りへと語調が変化する。肉体上の弱さや、病気、また失敗について述べることはあっても、自身の信仰上の懐疑を吐露したり、救済の確信を疑う記述はこれ以降一切現れない。この新生体験を経て、ホイットフィールドの説教者としての活動は本格的に開始されたのである。

「新生」は、ホイットフィールドの説教で、最も良く用いられた言葉で、生涯を通じて、宣教の中心的なテーマとなる。英国プロテスタントにとって、「新生」自体は新しい主題ではない。福音書に記されたニコデモとキリストとの対話中登場する<sup>12</sup> このテーマは、特に、回心体験を強調するピューリタン他、英国非国教徒により説教の中で頻繁に取り上げられて来た。<sup>13</sup> しかし、ホイットフィールドとオックスフォード・メソジストはこの体験の重要性を先行者の誰よりも殊更強調し、説教の中心に据えた。かといって「新生」体験に神学的説明を加えた訳ではない。体験について理性的な解釈を試みたり、それに伴う情感について語るのでもなかった。ジョナサン・エドワーズがノーサンプトンの信仰復興を『忠実なるナラティブ』(*A Faithful Narrative of the Surprising Work of God*, 1737)に記録することにより、覚醒期、新しい救済のパラダイムを提示したような努力はなされなかった。また、同じくエドワーズの『宗教的情感論』(*A Treatise Concerning Religious Affections*, 1746)に見られるような回心体験の心理学的考察も、ホイットフィールドやメソジストの関心事とはならなかった。

オックスフォード・メソジストの理解では、「新生」は、ホイットフィールド自伝に表現されているように、体験者が突然、心に「情熱」を感じる抗い難い瞬間的恩賜体験だとされた。ホイットフィールドは、これを、極めて私的で個人的体験と理解し、教会や共同体等、体験者を取り巻く外的制度とは必ずしも関連しない、個別的宗教経験であると主張した。この個人的な回心体験への導きが、ホイットフィールドの説教の中心主題となって行く。個人的宗教体験の強調は、やがて制度的教会と共同体の維持を主眼とする規制教会の利害と対立的な構図を取ることになり、

各地で教派の分断や分裂を引き起こす火種を提供した。ホイットフィールドとオックスフォード・メソジストの「新生」のメッセージは、個の回心を強調することにより制度的教会の枠組みをゆるがす革新的な民衆運動を生み出す可能性を、運動初期より擁していたのである。

## 2. 新大陸ジョージアの孤児院建設

1736年、大学卒業後、ホイットフィールドは英国教会の執事に任命され、1733年から建設が始まっていた新大陸ジョージアに、宣教師として赴任する。この地に先に赴いていたウェスレーやインガム等、オックスフォード・メソジストの仲間に誘われて新大陸を目指すことになる。「彼等の報告で私の心は燃え、神の働きの為に、海外へ赴きたいと望むようになった。しかし、明らかな召命はなく、また航海に耐えるには身体が虚弱すぎるとその時には思われ、海外渡航の思いを追い払おうとした」<sup>14</sup>と当時の気持ちを記しているが、ホイットフィールドにはウェスレー兄弟の去ったオックスフォードで、メソジストの指導や囚人伝道、教育事業を継続して行く責任もあった。逡巡の後、ジョン・ウェスレーからの手紙で、ついにジョージア渡航の最終的な決断をする。建設初期のジョージアで想像以上の困難を抱えたウェスレーは、「神が御自身の僕の幾人かの心を掻き立てて下さるまでは、デラモット氏だけが私の仲間です。収穫は多いが働き手が少ないこの地で、私達を助ける為に、神の御手にその命をゆだね、立ち上がる人が来て手助けしてくれるまで。ホイットフィールドさん、あなたがその人物ではないでしょうか」<sup>15</sup>とホイットフィールドを誘う。呼び掛けに答え、1738年、ホイットフィールドがジョージアに到着した時、ウェスレーは植民地での働きに挫折し、すでにイングランドに帰還していた。<sup>16</sup>

ジョージア植民地サヴァナ到着後、ホイットフィールドは、ウェスレーの仕事を引き継ぎ、インディアン、ユダヤ人、スイス人といった英国系プロテスタント以外の近隣住民をも精力的に訪問する。中でもドイツ系移民の敬虔主義に、ここでも影響を受けることになる。ドイツ系の人々は、すでにサヴァナ近郊のエベネゼーで孤児院を設立し、17名の孤児と1名の寡婦を保護していた。この地域訪問直後の記録には「神がなんとかその僕達の心を掻き立て、サヴァナにもうひとつ（の孤児院）を建てる為の献金を与えるよう働いてくださるように」<sup>17</sup>とある。植民地での孤児院建設は、ウェスレーが企画していたことであったが、過酷な植

民地建設の労働の中で子供の教育がないがしろにされている現実をホイットフィールド自身、目の当たりにしたのである。到着して12日目の1738年5月19日、「もし適切な場所が子供達を生活させ教育する為に備えられたら、植民地は有益な多くの人員を確保することになるだろう。その為には、孤児院ほど効果的な施設はない。裕福な人々の幾人かが寄付を申し出てくれるならば、サヴァナにすぐに建てられるかもしれない」と日誌に記している。<sup>18</sup>

フランケ等の著作を通して学生時代から共感していたドイツ敬虔派、ザルツバーガーやモラヴィア派の信仰実践を植民地で直接目にし、ホイットフィールドはすぐにその実現を思い立ったのである。「ドイツでフランケ博士が成したことを読んで聞いたりし、同じようなものをジョージアでも建設し、経営することができればと考えた。貧しい孤児達がすでにおり、またその数はすぐに増えると思われた」<sup>19</sup>との確信は、その後、ホイットフィールドの生涯に渡って継続する孤児院建設事業となった。<sup>20</sup>

孤児院建設の資金集めを目的に、ホイットフィールドはイングランド帰還を決める。最初の植民地滞在は約三ヶ月間であった。わずかな滞在期間中、彼は、建設が始まったばかりの植民地の人びとの信頼を獲得し、学校創立の準備を進め、信仰的な読み物を備えたり、医療施設の整備を助けたりする。生涯継続するジョージア植民地との友好関係の土台は、最初の渡航での短期滞在中築かれたのである。植民地を後にするに当たり、「私はこれ程後ろ髪を引かれる思いで出立したことはなかった。アメリカは、キリストについて学ぶのにすばらしい学校だと思ふ。サヴァナでは実りが期待される。滞在期間が長引くにつれて、会衆の数は増して行ったのだから」<sup>21</sup>と、初めての植民地渡航での確かな手応えを感じていた。

イングランドに帰還したホイットフィールドは、ジョージアでの孤児院建設の為の資金調達、そして伝道活動という二つの目的を持って、都市部での伝道集会を開始した。1738年12月には、イングランドで正式に国教会教職として按手礼を受け、イングランド各地を巡り、孤児院建設の寄付を募りながら宣教活動を続けた。この頃、ウェスレー兄弟等の宣教活動も同時に行われ、ウェールズ信仰復興が始まっていた。ジョン・ウェスレーも1739年4月、ホイットフィールドの影響を受け、プリストルで初めての野外集会を行った。この旅行中、各地で行った野外集会には、多くの聴衆が集まり、ホイットフィールドの説教者としての名声が高まって行った。それと共に、野外での説教という、既成教会の枠をは



み出したスタイルに対するメソジスト批判の声も挙がっていく。孤児院建設の為に集めた千ポンド程の資金をたずさえ、1739年8月、彼は再び新大陸へ向かった。

ホイットフィールドの説教スタイルは革新的であった。多くの聴衆を前にして、説教ノートやメモは用いずに、大きな身ぶり手ぶりを交えながら大声で、即興説教を劇的に語る。<sup>22</sup> 聴衆の反応を機敏に察知しながら、聞き手に応答する形で語るホイットフィールドは、巧みに聴衆の心を掴んで行く。伝統的なキリスト教の福音メッセージを、その時と場所に合わせて、一般聴衆が共感できる形で提供したのである。スタウトはこのようなホイットフィールドを、伝統的な「学者的説教家」(scholar-preacher)ではない、「役者的説教家」(actor-preacher)と呼ぶ。<sup>23</sup> ホイットフィールドの説教は、明解な聖書講解で、聖書中のエピソードや人物伝を噛み砕くように語る大衆向説教が殆どである。印刷された説教中には疑問符や感嘆符も多用され、感情のこもった、また聞き手の反応を迫る形のものであったことが推測される。イングランド宣教旅行の成功で自信を得たホイットフィールドは、新大陸でも商業中心地の都市部を目指し、宣教旅行を開始する。

### 3. 新大陸カルヴィン主義諸派とホイットフィールド

二回目の植民地旅行では、最初の訪問地として、商都フィラデルフィアを選んだ。ウィリアム・ペンによる建設以来の宗教的寛容政策もあり、多くの異なった宗教グループの移住先に選ばれていたペンシルヴェニア植民地の中心都市フィラデルフィアには、自由の気風がみなぎっていた。1739年11月8日の屋外集会には、評判の伝道者が即興で説教するのを実際に聞こうと、市の人口のほぼ半数に当たる聴衆が参集したという。この日、「正直で、心の広い、真のイスラエル人のごとき」クエイカー教徒と食事をしたホイットフィールドは、裁判所前の階段に立ちおよそ六千人の聴衆を前にした。「住民達は熱心に教会以外の場所で私に説教するようにと勧めてくれた。ここはイングランドの場合と随分事情が違う。あちらでは、皆、説教は野外では上手く伝わらないと考えているが、ここでは壁で遮られた教会堂内で語られたら嫌がるのだ。「主よ、私が全ての人々のために全ての形を採用することを許して下さい。そうすれば、幾人かの魂を勝ち得ることができましょう。福音をあらゆる場所で、あらゆる形で語り、またあらゆる人々に行き渡らせたいのです」<sup>24</sup> と、こ

の日の日誌には記している。新興都市フィラデルフィアの一般市民は、ホイットフィールドの革新的なスタイルを歓迎したのである。伝道集会はニューヨークでも開かれたが、ホイットフィールドはその途上、エリザベスタウン、メイドンヘッド、アビントン、ネシャミニ、バーリントン、ニューブランズウィック等、ニュージャージー各地を巡回した。

中部植民地では、ホイットフィールドの登場以前、1720年代にオランダ改革派のセオドル・フレリングハイゼン (Theodore Frelinghuisen, 1691-1747)、続く1730年代には長老派テネント親子の活動により、地域的な信仰復興運動が既に開始されていた。ペンシルヴェニアの長老派は、リバイバル推進派の「ニュー・サイド」と、これを批判する「オールド・サイド」に分かれて行く。「ニュー・サイド」のウィリアム・テネント (William Tennent, 1673-1746)、ギルバート (Gilbert Tennent, 1703-1764) 親子は「丸太大学」(Log College) での牧師養成を、すでに始めていた。フィラデルフィア野外集会から二日後、11月10日、「フィラデルフィアから20マイル離れた場所でアカデミイを開いている」<sup>25</sup> ウィリアム・テネントの訪問を受ける。この日、テネントと「スウェーデン人牧師」と共に、ホイットフィールドは囚人伝道に出かけたことも記録している。フィラデルフィアでも、他の場所と同じく、ホイットフィールドは彼に賛同する人であれば教派に拘らず交流を持ったようである。この時ホイットフィールドに心酔したギルバート・テネントは、ニューヨーク、フィラデルフィアの旅行に伴い、その伝道説教の技術を学習して行く。

翌1740年、ホイットフィールドはピューリタン・ニューイングランドを訪問する。ボストン、ブラトルストリート教会牧師ベンジャミン・コールマン (Benjamin Colman, 1673-1747) の呼び掛けにより、ニューイングランド会衆派は、南部、中部植民地で評判になっていたホイットフィールドに教会訪問を促したのである。ボストンでは、アングリカン教会での説教を望んだが、受け入れられず、結局最初の集会はコールマンが牧師をつとめる会衆派ブラトル・ストリート・ミーティングハウスで開かれた。マザー家が衰退しつつあった18世紀半ばのボストンで、会衆派教会の指導的立場にあったコールマンはホイットフィールドを「時代の驚異」(the Wonder of Age) であると評している。<sup>26</sup>

ボストン第三教会 (オールド・サウス教会) 牧師のトーマス・プリンス (Thomas Prince, 1687-1758) はホイットフィールド訪問二日目、9月15日の様子を次のように記録している。「午後、シワール博士と私とで彼 (ホイットフィールド) を訪ねたところ、町の他の牧師や紳士達の幾人かがそこにいた。コールマン博士とクーパー牧師がその日の午後、彼等の

公の礼拝の為のハウスで説教してもらおう約束を取り付けていた。一時間程して、そこに行くとなちまちその場所は二千か三千かの人々で一杯になった。彼は簡潔で熱心な祈りを捧げ、ヨハネ伝17章2節から説教のテキストを選んだ。人々の罪について述べた後、「彼は神の預言者のように霊と力を持って語った。そして、特に適応の段階になると、聴衆に向かい、大変優しく、熱心に、感動的な様子で語りかけ、私達が愛するあがない主の前に出て、親しい者となるようにと招き、聴衆は涙を流した」。ボストンの教会はみな「改革され覚醒させられ」、多くの人が新しく「神との契約に入った」と、プリンスは述べている。<sup>27</sup> 町の中心にあるボストン・コモンで開かれた最初の集会には五千人の聴衆が押し寄せたとする。別の日には、八千人、またある時には一万五千人の聴衆が集まったと当時の新聞は報じた。

ボストンで大きな成功をおさめた後、10月17日、ホイットフィールドはノーサンプトンに向かい、ニューイングランド覚醒運動の中心人物ジョナサン・エドワーズと初めて対面する。エドワーズの祖父ソロモン・ストダード (Solomon Stoddard, 1643-1723) は、孫のエドワーズに先行するコネチカット渓谷覚醒運動の推進者であった。ホイットフィールドは「ノーサンプトンの偉大なストダード」の著書を説教中で聴衆に紹介する程ストダードを尊敬していたし、また、エドワーズ自身の働きとその敬虔をも既に聞いていた。<sup>28</sup> ニューイングランド旅行は、エドワーズと関係深いニューヘイヴンへと続けられ、さらにニューヨーク各地の巡回を持って大きな成功の内に終わる。

英国教会教職として按手を受けていたホイットフィールドであったが、ニューイングランドで主に彼を支持したのはピューリタンの子孫、会衆派の牧師達であった。新大陸での活動はペンシルヴェニアの長老派、ニューイングランド会衆派といったカルヴィン主義諸派の支援を得て展開して行った。自らカルヴィン主義の立場を言明していたホイットフィールドは、新大陸のカルヴィン主義者との交流の中で、次第にその神学的立場を強固にして行く。そしてついには、大学以来の同志であり、また信仰上の師でもあったウェスレー兄弟と次第に袂を分かち、1740年12月24日付けの公開書簡の中で、ホイットフィールドは、「ユニヴァーサルな救済論」を喧伝しているとしてウェスレーの「大いなる誤り」を指摘した。さらに、書簡中、カルヴィン主義の「神の選びの教義と聖徒の堅忍」の基本に、自らは留まることをウェスレーに宣言する。大学時代から続いたウェスレー兄弟との交友は、こうして神学上の違いから決裂する。<sup>29</sup> 以後、オックスフォード時代以来のメソジストはウェスレー

のアルミニウス主義メソジストとホイットフィールドのカルヴィン主義メソジストとに分かれることになる。<sup>30</sup>

#### 4. 環大西洋のリバイバル

アメリカ巡回旅行の大きな成功で、ホイットフィールドは環大西洋リバイバルの象徴的存在となって行く。二回目の新大陸旅行から帰還後は、その拠点をイングランドではなくスコットランドに置く。イングランドではすでにアルミニウス主義メソジズムがウェスレー兄弟により浸透させられつつあった上、英国教会自体、元来アルミニウス主義の傾向が強くなり、ホイットフィールドのカルヴィン主義と競合するのは必至だった。こうした事情から、彼は覚醒運動の拠点をカルヴィン主義的傾向の強いアメリカ植民地と共にスコットランドに求めた。都市としては、フィラデルフィア、ボストン、そしてエジンバラ、ついでグラスゴーがホイットフィールドの環大西洋活動の拠点となって行く。<sup>31</sup>

ホイットフィールドは新大陸巡回以前からウェスレーと共にアイルランドやウェールズでの宣教を展開していたのだが、彼が最も成功したのはスコットランドであった。その理由は、この地が新大陸の中部植民地やニューイングランドと似通った歴史背景を持っていたからだ。スタウトは説明する。<sup>32</sup> アメリカ英国領植民地と同じく、スコットランドのプロテスタントもイングランド宗教改革の産物で、アングリカンの監督制度、形式主義、アルミニウス主義神学等への強い嫌悪感を持っていた。スコットランド教会は教義的には、ウェストミンスター信仰告白を信条としている。また、全国的教会組織はジョン・ノックスの長老主義の青写真にのっとったもので、カルヴィンのジュネーヴがその基本理念には組み込まれていた。アメリカのピューリタンと同じく、カルヴィン主義的環境や素養が整備された、ホイットフィールドの活動にとって理想の場所となったのがスコットランドであった。

ニューイングランドのピューリタニズムと同じく、スコットランド教会は社会のあらゆる層にその影響力を張り巡らし、高度な識字教育と神学教育を行っていた。聖書教育に加え、ウェストミンスター信条を基本とした教会教育は、ニューイングランド会衆派よりも、更に徹底した形でリフォーム正統主義神学を一般信徒にまで行き渡らせていた。信条教育の徹底は、教理問答などを通じて組織的になされており、信徒の神学的知識はニューイングランドより、一層高度なものだったと思われる。

ニューイングランドや中部植民地が、ホイットフィールド巡回以前すでにストダード、エドワーズ、フレリングハイゼン、テネントの指導により地域的リバイバルを経験していたように、17、18世紀を通じて、スコットランド各地でも覚醒運動は起きていた。フィラデルフィア、ボストンと似た港湾都市のエジンバラが活動の拠点となり、パース、ダンディー、フィントレイ、そしてグラスゴー、アバーディーンへとホイットフィールドの巡回伝道は行われた。カルヴィン主義的基本理念の行き渡ったスコットランド各地での説教は、アメリカ巡回旅行と同じく大きな成功を納める。

こうして、大西洋の両岸で巡回伝道に成功したホイットフィールドは覚醒運動の象徴的存在として、港湾都市ボストン、フィラデルフィア、そしてスコットランドのエジンバラ、グラスゴーを結ぶ環大西洋地域をまとめあげて行く。各地のカルヴィン主義ネットワークを巻き込んで展開して行った覚醒運動は、英国教会のアルミニウス主義、ウェスレーのメソジズムへの対抗勢力として、ニューイングランド・ピューリタンの子孫、中部植民地の長老派、改革派、そしてスコットランドの長老派の間に神学的コンセンサスと協力関係を築いて行った。同時に、孤児院、病院の建設、社会的弱者の救済運動といったメソジストの活動においては、ウェスレーと同じく、その方法を特にドイツ敬虔主義のフランケやモラヴィア派に学び、伝統的カルヴィニズムに敬虔主義の特徴と実践が付け加えられて行ったのである。こうして、ホイットフィールドの影響下に置かれた各地域は、すでに宗教的、文化的基盤として行き渡っていた宗教改革以来のカルヴィン主義に敬虔主義的特徴が新しく備わり、個人による回心体験の重要性を特に主張する「回心中心的福音主義」(Conversional evangelicalism)へと移行して行く。イングランドへの影響は比較的少ないものの、新大陸ニューイングランド、中部植民地、そしてスコットランドの主流派教会は、福音主義を基盤とした宗教的コンセンサスにより結ばれて行ったのである。<sup>33</sup>

## 5. リバイバルと出版文化

ホイットフィールドが環大西洋の著名人となり、大衆の人気を得て行った主要な原因として、急激な発展を遂げつつあった18世紀における情報伝達手段の利用が挙げられる。神学的に伝統主義者で、17世紀ピューリタンの著作を重視したホイットフィールドであるが、それを伝

える方法においては18世紀的な伝達手段を巧みに活用したのである。宗教改革期以来、地理的広範囲に散在していたプロテスタント諸派の指導者達は頻りに書簡交換し、文通によりコミュニケーションを図っていた。ホイットフィールドは文通による情報交換から、いち早く、新聞、雑誌を用いた情報流通を採用して行った最初の宗教指導者である。

歴史家フランク・ランバートは、ホイットフィールド宣教の成功を18世紀市場革命で誕生した近代型消費社会との結びつきで分析する。<sup>34</sup> 市場革命時代、イングランドでは、新聞、雑誌に宣伝広告を掲載する近代的広告が開始された。最初に新聞記事にホイットフィールドを登場させたのは、ウェスレーとホイットフィールドのもとで回心体験をしたウィリアム・シーワード (William Seward) という商人である。シーワードは、1737年、ホイットフィールドのジョージア渡航についての記事を『デイリー・アドヴァタイザー』(*Daily Advertiser*) 紙に掲載する。以後、二年間、シーワードは記者としてホイットフィールドに同行し、集会に参集した聴衆の数、集められた基金の額等、逐一、報告記事として新聞に提供していった。ホイットフィールド自身は、新聞掲載されることを、最初は好まなかったのだが、しかしその効果を次第に実感していく。1738年、孤児院建設資金調達のために、ロンドンに帰還した時、ホイットフィールドの『ジャーナル』は、各出版社の版權獲得競争を起こすことになった。6ペンスという安価な値段で販売された『ジャーナル』は、九ヶ月の間に六版を重ねる売れ行きとなった。また、ホイットフィールドを著者とする出版物は、1737年時点で、主に説教からなる十種類がすでにあったが、1738年には『ジャーナル』も含め、三十に上る数に達していた。1739年、第二回の新大陸旅行に伴ったシーワードがロンドンに帰還した後、ホイットフィールドは、自らレポーターとして自身の活動の逐一を第三者の報告の形で新聞に提供して行った。<sup>35</sup>

さらにホイットフィールドは、自身の活動を主に掲載する雑誌創刊に関わる。1741年4月、ホイットフィールドの友人で、ロンドンで印刷業を営むジョン・ルイス (John Lewis) を主幹に、『週刊歴史報』(*The Weekly History; or, An Account of the Most Remarkable Particulars Relating to the Present Progress of the Gospel*)<sup>36</sup> が刊行される。ルイスは表向きの主幹で、事実上の記事の提供者はホイットフィールド自身であった。記事の選択や構成もホイットフィールドの手に委ねられ、彼の関わるリバイバルや慈善活動についてのニュースが随時掲載された。雑誌には植民地のニュースと共に、孤児の回心体験談も紹介され、大衆の興味を誘う読み物として流通させられ、各地でのリバイバルをより現実的な出来事として読者に

伝えて行くのに貢献した。アメリカ、スコットランド旅行中もホイットフィールドはロンドンに編集方針に関する指示を送り、指導的役割を担い続けた。リバイバルの報告と共に、ホイットフィールドに宛てられた他の牧師達からの手紙も頻繁に掲載され、雑誌は環大西洋ネットワークの覚醒運動参画者が情報意見交換を図る場として機能して行く。週刊誌形態での出版は、よりエリート層をねらった月刊誌より安価な分、一般受けし、リバイバルの民衆への浸透はさらに促されて行った。

『週刊歴史報』ではホイットフィールドの伝道活動に関して、批判的な意見は全く取り上げられず、好意的な情報が紹介され、大衆向けニュースとして流される仕組みとなっていた。こうした福音主義者の宣伝活動は、次第に他の伝道者にも採用され、福音主義雑誌が相次いで出版されることになった。<sup>37</sup> アメリカではボストン、オールド・サウス教会牧師の息子、トーマス・プリンス・ジュニア (Thomas Prince, Jr.) がルイスの『週刊歴史報』を範とした『キリスト者歴史報』(*The Christian History*) を1743年3月に刊行する。プリンスはこの雑誌で、植民地の福音主義牧師の手紙、また『週刊歴史報』や『グラスゴー週刊歴史報』からの記事、あるいは宗教的出版物の原稿の一部を集めて転載した。大西洋の両岸での雑誌の同時刊行により、ホイットフィールドは、活動を支える文化的地盤を新旧両世界で獲得していったのである。<sup>38</sup>

ランバートは、ホイットフィールドの自伝出版が、雑誌を用いた覚醒運動宣伝活動開始と同時期であることに注目する。自身の新生体験を自伝の中心主題としたホイットフィールド伝は、1740年、あわせて十種類の版が出された。その内訳は、ロンドン四版、エジンバラ版、ボストン三版、フィラデルフィア二版となっている。安価な値段で一般にまで行き渡るように配慮されたホイットフィールド伝は、出版物により、新生体験をその中核とする福音メッセージを「地の果てまで」伝えることを目的としたもので、ホイットフィールドの伝道集会に実際に参加した聴衆にはより臨場感ある読み物として、また、彼の訪問が実現できない地域にも購読者を求めて行った。<sup>39</sup>

情報伝達媒体として、出版物を巧みに用いたホイットフィールドであるが、しかし、覚醒運動に反対する牧師達の記事が新聞雑誌に掲載され、また、リバイバルを批判あるいは揶揄する記事が出回り始めると、次第にジャーナリズムへの関与を取り止めて行く。1742年までには、一般プレス報道からは身を引き、自身が制御できる福音主義出版物と書簡ネットワークのみに関わりを制限して行く。報道媒体をいち早く、巧みに用いたホイットフィールドはまた、情報の過剰がもたらす危険性をも理解していた。

## 6. リバイバルと宗教文化の民衆化

### (1) 最後の大西洋横断

「私は孤児院をふさわしい形に整える為に今また出発しようとしています。秋に出発すれば、ジョージアに冬には着くでしょう。あちらでは好天の季節です。3月25日は私が孤児院建設の最初の礎を置いた記念の日です。記念日までには、すべての建物の建築が終わり、植民地は安定するでしょう。それから、大陸沿いにニューイングランドに巡回伝道に行きます。もし、神が許されるなら、我が愛するロンドンと英国の友人達のもとに再び戻って参ります」。<sup>41</sup> 十三回目の新大陸渡航を目前にした惜別説教の中で、このように語ったホイットフィールドに、十四回目の航海となる英国帰還はなかった。1770年、病気を押してのニューイングランド巡回伝道中、ホイットフィールドはニューベリーポートで喘息の発作を起こし、そのまま没する。ホイットフィールドの遺体は、彼の影響を受けた人々により建設されていたニューベリーポートのオールド・サウス長老教会の地下に埋葬された。

精力的な伝道旅行により宗教上のセレブリティとなったホイットフィールドは、生涯に一万八千回以上の伝道集会をイングランド、スコットランド、北アメリカ植民地で行った。生涯、何等制度的な支援を取り付けることはなく、自分の教会や背後団体を持つこともなかった彼は、マスメディアの効力と、出版文化が可能とする広範囲への影響力を利用し、環大西洋福音主義文化の形成に大きく貢献した。その独特なパフォーマンスの伝道集会により新大陸植民地各地で、教派、民族、人種を越えて多様な聴衆を引き付けて行ったホイットフィールドの自立性は、セルフ・メイド・マンを理想とするアメリカ的ヒーローの原型と符合し、新大陸の気風に合致した。安価な出版物による福音の提供、野外での伝道集会は大衆の宗教的関心を喚起し、新しい民衆的宗教文化の到来を促した。ホイットフィールドの始めた大規模な大衆伝道活動は既存の宗教的ヒエラルキーを覆し、宗教文化変容の契機を作ったのである。

### (2) ホイットフィールドとホイートリー

ホイットフィールドの死にあたり、宗教的エリート層の牧師達によるエレジーと共に、黒人奴隷フィリス・ホイートリーが献じた追悼詩が出版されたことは、宗教文化変容の一例と言えるだろう。ホイートリーの詩は最初、イングランドの福音主義雑誌に掲載される。フィリスの女主人スザナ・ホイートリーは熱心な福音主義活動家で、ボストンを度々訪



れるホイットフィールドに並々ならぬ敬意を寄せていた。ホイットフィールドは1770年3月27日付けの遺言中、ジョージアの孤児院経営を、熱心なメソジストで彼の後援者であったハンティンドン伯爵夫人セリーナ・ヘイスティングズに託す。伯爵夫人や富裕な博愛家ジョン・ソーントン(John Thornton, 1720-1790)等、英国特権階級の名士達は、ホイットフィールドを支援し、新大陸でのインディアン教育機関設立等、環大西洋リバイバルで誕生した福音主義宣教と慈善活動の為の資金援助を続けていた。女主人スザナ・ホイートリーの仲立ちで、フィリスはハンティンドン伯爵夫人に哀悼詩を献呈する。この時のやり取りを機に、ホイートリーの処女詩集は、伯爵夫人の後援を受けボストンではなくロンドンで出版される運びとなる。<sup>42</sup>

ホイットフィールドと奴隷共同体との関係は、しかし、複雑である。初期の説教中、彼は、「私達は可哀想な黒人のことを忘れてはいけません。イエス・キリストは他の人びとの為にと同じく彼等の為にも死なれたのです。・・・キリストにあっては男も女も、繋がれた者も自由人もありません」<sup>43</sup>と、恩賜体験における人種、性別間の平等を説き、黒人奴隷の魂の救済を願った。人種や民族の境界を越えたホイットフィールドの人氣はボストンでも目撃されている。トーマス・プリンスは「彼は年とった人々、中年の者、若者、インディアン、そして黒人に特に奨励をし、そしてそれらの人々に大変効果的に語りかけた」と、年令や人種を越えたホイットフィールドの宣教について報告している。<sup>44</sup>しかしながら、後年、南部アメリカにおいて、彼は皮肉にも自ら奴隷所有者になっていた。サヴァナの孤児院建設地開墾の労働力として、1764年、五十人程の黒人奴隷を購入したのである。ジョージアで、富裕なプランテーション所有者階級に受け入れられて行った過程で、この階級の慣習をも次第に受け入れるようになって行った。

しかし、ホイットフィールドの主張した個人の主体的回心体験の推奨と覚醒のナラティブは、説教者自身の人種、階級の束縛や限界を越えて作用した。ホイートリーの回心もその一つだと言えよう。アフリカからアメリカへと送られ、キリスト教に改宗し、ピューリタンの伝統を継承するボストンのオールド・サウス教会で洗礼を受けたホイートリーは、主体的な信仰告白を自ら表明した黒人奴隷キリスト教徒のひとりである。彼女の詩は、題材が広く、政治、宗教等、公に関する詩を共同体の集合的体験を踏まえて表現する点が特徴的である。ホイットフィールドの死にあたり、ニューイングランド福音主義共同体が共有した哀悼を、ホイートリーは代表して表現した。個としての体験をつきつめる宗教的

覚醒は、しかし、彼女自身の内にある「アフリカ性」をも次第に目覚めさせて行く。彼女は、創作活動の継続の中で、白人キリスト者共同体に完全に同化し得ないアフリカ系としての、ディアスポラの自己存在を意識し始める。この自意識は、公の機会に創作され発表されることの多かった彼女の詩に、隠されたもうひとつの声を付け加え、その詩には重層的意味が付与されて行く。<sup>45</sup> 共同体の代表として詩作をしながら、黒人の声を滑り込ませて行く独特な構造をもつホイットリーの詩は、同時代のスレイヴ・ナラティヴと呼応する特徴も持つ。<sup>46</sup>

ホイットフィールドは「アメリカ・リバイバルの創始者」と呼ばれる。<sup>47</sup> 環大西洋覚醒運動のシンボルとなったホイットフィールドの活動は、その旺盛な植民地間移動により、1720年頃より開始しつつあった新大陸プロテスタント諸教派の再編を促し、「福音主義キリスト教」という、まさにアメリカ的な新しいタイプのプロテスタンティズムの登場に貢献した。ニューイングランドのピューリタン、中部植民地カルヴィン主義諸派は、リバイバルにより、さらに相似した特色を獲得して行く。独立革命前夜のアメリカは、人種、性差、階級を、一時的にせよ、ないまぜにする文化的混淆の活力を福音主義リバイバルにより体験する。政治変動の胎動期にあった植民地は、リバイバルの熱気の中、ゆるやかな宗教的、文化的統合を体験し、特有の宗教文化を生み出しつつあった。

## Notes

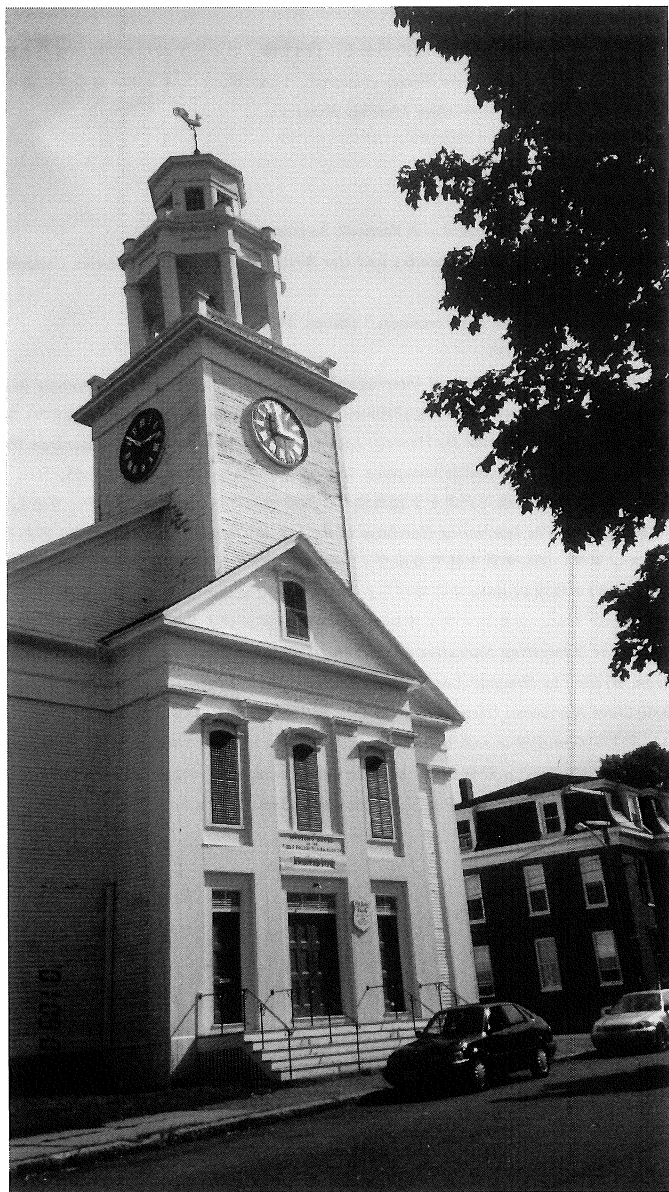
- 1 「福音主義」は16世紀初頭、ドイツとスイスで発生したばかりの初期プロテスタント宗教改革に付けられた呼称であるが、以来、様々に用いられて来た。現代、宗教史家のコンセンサスとしては、18世紀英米のリバイバルを経て、その特徴が備えられた、特にアングロ・プロテスタントを中心とした運動との理解が一般的である。デイヴィッド・ベビントン「福音主義」の特徴として、(1) 新生 (new birth) を強調する「回心主義」(conversionism)、(2) 伝道活動等の「実践主義」(activism)、(3) 聖書に最終的権威を置く「聖書主義」(biblicism)、(4) キリストの犠牲による死を唯一の救済の拠り所とする「十字架中心主義」(crucicentrism)の四点を挙げる。David W. Bebbington, "Evangelicalism in Its Settings: The British and American Movements since 1940," in *Evangelicalism: Comparative Studies of Popular Protestantism in North America, the British Isles, and Beyond, 1700-1900*, ed. Mark A. Noll, Bebbington, and George A. Rawlyk (New York: Oxford University Press, 1994), 367; Mark A. Noll, *American Evangelical Christianity: An Introduction* (Oxford: Blackwell, 2001), 12-15.
- 2 Benjamin Franklin, *Autobiography*, eds. Leo Lemay and P. M. Zall (New York and London: Norton, 1986), 87. ホイットフィールドもまた、フランクリンと推測されるフィラデルフィアの出版業者が、「私の『説教集』と『ジャーナル』の印刷購入申込を200件以上取ったと語っていた」(1739年11月28日水曜日)と記している。George Whitefield, "A Continuation of the

- Reverend Mr. Whitefield's Journal From His Embarking after the Embargo, to His Arrival at Savannah in Georgia (August, 1739-January, 1740)," *George Whitefield's Journals* (Guildford and London: The Banner of Truth Trust, 1969), 359.
- 3 Whitefield, "A Short Account of God's dealings with the Reverend Mr. George Whitefield, A.B. Late of Pembroke College, Oxford from His Infancy, to the Time of His entering into Holy Orders (1714-1736)," in *Whitefield's Journals*, 37.
- 4 ホイットフィールドの伝記については *Whitefield's Journals* の他、以下を参照した。John Gillies, D.D., *Memoirs of Rev. George Whitefield: Revised and Corrected with Large Additions and Improvements to which appended on Extensive Collection of His Sermons and Other Writings* (Middletown: Hunt & Noyes, 1839); Albert D. Belden, D.D., *George Whitefield—The Awakener: A Modern Study of the Evangelical Revival* (Salisbury Square, London: Rockliffe Publishing Company, 1930); Harry S. Stout, *The Divine Dramatist: George Whitefield and the Rise of Modern Evangelicalism* (Grand Rapid, Michigan: William B. Eerdmans Publishing Company, 1991).
- 5 *Whitefield's Journals*, 38-39.
- 6 *Whitefield's Journals*, 45.
- 7 *Whitefield's Journals*, 47.
- 8 Gillies, 2.
- 9 「メソジスト」の呼称は、ウェスレーと同窓のオックスフォード生が付けたもので、古典的な言い伝えに遡るといふ。ネロ皇帝時代のローマで力を持っていた医学の一派が、その謹厳な生活態度の推奨により「メソジスト」と呼ばれたとの伝承による。初期の主要なメンバーは、ジョン・ウェスレー（リンカーンのフェロー）、チャールズ・ウェスレー（クライスト・チャーチの学生）、リチャード・モーガン（クライスト・チャーチの学生）、カークハム（マートンの学生）、ベンジャミン・インガム（キングズ・カレッジの学生）、プロートン（エクセター）、クレイトン（ブレイズンノーズ・カレッジ）、ジェイムズ・ハーヴェイ、ホイットフィールド（ペンブルックの学生）、他 15 名であった。Gillies, 15-16; Belden, 18.
- 10 同時代の「自費学生」に、後に文学的名声を得るサミュエル・ジョンソンがいた。大学で学業に最も重点を置くのは、こうした中間層自費学生だった。
- 11 *Whitefield's Journals*, 58; Gillies, 17.
- 12 新約聖書「ヨハネによる福音書」三章。
- 13 初期ピューリタニズムの主要な神学者ウィリアム・パーキンス、リチャード・シプスの二人は何れも、救済における回心と新生の確信を殊に重要とみなした。
- 14 Whitefield, "A Further Account of God's Dealings with the Reverend Mr. George Whitefield, From The Time of His Ordination to His Embarking for Georgia. (June, 1736-December, 1737)," in *Whitefield's Journals*, 77.
- 15 *Whitefield's Journals*, 79.
- 16 ジョン・ウェスレーは1735年、アメリカ植民地への渡航中26人のモラヴィア派移民団と出会い、強い衝撃を受ける。ジョージアでの挫折後、1738年、ロンドンで回心体験をした彼は、ドイツのモラヴィア派共同体を訪問し、生涯に渡る影響を受け、本格的宣教を開始する。
- 17 *Whitefield's Journals*, 159.
- 18 *Whitefield's Journals*, 156-157.

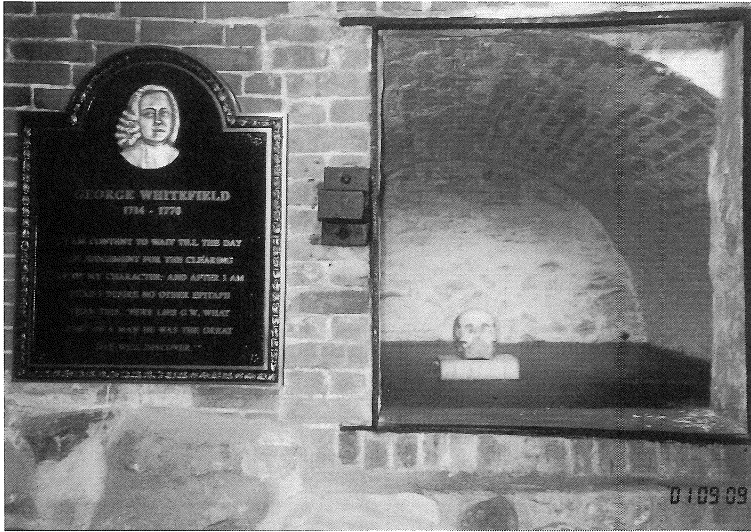
## George Whitefield and the Rise of the Trans-Atlantic Evangelical Culture, 1738-1771

- 19 Gillies, 31-32. ホイットフィールドの回想によると、建設初期のジョージアにはロンドンで事業に失敗した人びとやその他イングランドから渡ってきた移住者に加え、スコットランド高地地方出身者、またザルツバーガー、モラヴィア派といったプロテスタント敬虔派が入植していた。モラヴィア派の人びとはロンドンにも渡っており、ホイットフィールドはそこでも彼等と交流を持つ機会を得る。
- 20 ベテスダ建設については次の研究書がある。Edward J. Cashin, *Beloved Bethesda: A History of George Whitefield's Home for Boys, 1740-2000* (Macon, Georgia: Mercer University Press, 2001).
- 21 *Whitefield's Journals*, 164.
- 22 即興説教は1735年よりジョン・ウェスレーが始め、他のメソジストに勧めた方法である。ホイットフィールドの即興説教デビューは1737年12月28日、ジョージア渡航前に行われた。Stout, 43-44.
- 23 Stout, xviii-xix.
- 24 *Whitefield's Journals*, 343.
- 25 *Whitefield's Journals*, 344.
- 26 Thomas Prince, ed., *The Christian History; Containing Accounts of the Propagation and Revival of Religion in Great Britain, America, &c. For the year 1744* (Boston. N.E.: Kneeland and T. Green, for T. Prince, junr., 1745), 366.
- 27 *The Christian History*, 377-378.
- 28 例えば、Solomon Stoddard, "The Safety of appearing in the righteousness of Christ" が以下の説教に引用されている。George Whitefield, "The Lord our Righteousness," in "Selections from the Sermons and Other Writings of Rev. George Whitefield," Gilles, 307.
- 29 Whitefield, "A Letter from the Rev. George Whitefield to the Rev. John Wesley," Bethesda, Georgia, 24 December, 1740 in Gillies, 626-642.
- 30 Gillies, 58-59. アメリカのメソジストは独立革命後、トーマス・コーク、フランシス・アズベリーの指導によりウェスレー＝アルミニウス主義が圧倒的多数を占めることになる。カルヴィン主義メソジストはアメリカ南部と、特にウェールズで残存する。George E. Clarkson, *George Whitefield and Welsh Calvinistic Methodism*, Welsh Studies, vol. 12 (Lewiston, N.Y.: The Edwin Mellen Press, 1996) は、ホイットフィールドとウェールズのカルヴィン主義メソジストとの関係を扱った数少ない研究書である。
- 31 Stout, 133-155.
- 32 Stout, 134.
- 33 ホイットフィールドのリバイバルはスコットランドで、初期には分離主義的なグループに支持された。しかし、教派主義に全く関心を払わないホイットフィールドから、分離派は次第に距離を置いて行く。スコットランドにおいても新大陸と同じく、覚醒運動の同調者は主流の公定教会牧師達であった。
- 34 Frank Lambert, "*Pedlar in Divinity*": *George Whitefield and the Rise of Modern Evangelicalism* (Grand Rapid, Michigan: William B. Eerdmans Publishing Company, 1991).
- 35 Lambert, 52-69.
- 36 1743年、*Christian History or General account of the Progress of the Gospel in England, Scotland, America as far as the Reverend Mr. Whitefield, his fellow-labourers and Assistants are*

- concerned と名称を変える。
- 37 引き続き刊行された雑誌に以下のものがある。1741年、ウィリアム・マッカロウによる『グラスゴー週刊歴史報』(*Glasgow Weekly History*)、1743年、ジェイムズ・ロウブによる『クリスチャン月刊歴史報』(*Christian Monthly History*)。
- 38 Lambert, 69-84.
- 39 Lambert, 13.
- 40 Lambert, 231.
- 41 Whitefield, “The Good Shepherd.—A Farewell Sermon,” Gillies, 594-606.
- 42 William H. Robinson, *Phillis Wheatley and Her Writings* (New York & London: Carland Publishing, INC., 1984), 25-26.
- 43 Whitefield, “The Lord our Righteousness,” Gillies, 312,
- 44 *The Christian History*, 381.
- 45 Katherine Clay Bassard, *Spiritual Interrogations: Culture, Gender and Community in Early African American Women’s Writing* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1999), 58-86; Francis Smith Foster, *Written By Herself: Literary Production by African American Women, 1746-1892* (Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, 1993), 1-55.
- 46 例えば、同じく福音主義共同体を支援母体に出版流通したスレイヴ・ナラティブとしては、Olaudah Equiano, *The Interesting Narrative of the Life of Olaudah Equiano* (1789) がある。エクィアーノ自身、回心体験を経てカルヴィン主義メソジストとなる。ナラティブの初期の購入者名は1814年版Preface中に挙げられており、そこにはハンティンドン伯爵夫人、ヘンリー・ソートン、ジョン・ウエスレー等、著名なメソジスト福音主義者の名前がある。Equiano, *The Interesting Narrative of the Life of Olaudah Equiano, or Gustavus Vassa, The African, Written by Himself* (Leeds: James Nichols, 1814) in Henry Louis Gates, jr., ed., *The Classic Slave Narratives* (New York: A Mentor Book, 1987), 5.
- 47 これに対し、ジョナサン・エドワーズは「アメリカ・リバイバルの神学者」と呼ばれる。“Editor’s Introduction” in C.G.Goen, ed., *The Great Awakening*, vol. 4, *The Works of Jonathan Edwards* (New Haven and London: Yale University Press, 1972), 5.



マサチューセッツ州ニューベリーポート、オールド・サウス教会(1756年建立)



オールド・サウス教会の地下にあるホイットフィールドの墓

